# 感性の目覚め

南 井 正 廣

奨励者紹介〔みない・まさひろ〕
同志社大学グローバル・コミュニケーション学部長
同志社大学グローバル・コミュニケーション学部教授
〔研究テーマ〕18世紀イギリス文学・文化

わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

（コリントの信徒への手紙二 4章18節）

## はじめに

はじめまして、グローバル・コミュニケーション学部長の南井です。普段は、京田辺キャンパスの全学英語科目や学部生向けに、コロンブス以来の地理上の発見によってヨーロッパに伝わった「グローバル商品（staple）―コーヒー、紅茶、チョコレート、砂糖など―の文化史」、「イングリッシュ・ガーデンの変遷」についての講義やゼミを担当しています。同志社大学には学生として4年、大学院生として2年、そして教員として30年ほどお世話になっていますが、残念ながら、キリスト教徒ではありません。恥ずかしながらチャペル・アワーへの出席も今日が初めてです。今回は、「目に見えないもの」という秋学期の大きなテーマで、学部長として、皆さんに何か話をするように依頼されたので、自分の経験として日頃感じているが、決して授業では話さないことを話してみようと思っています。授業や学会発表ではないので、話は全く学術的ではないこと、また、私はこのような高いところから人生を語れるような人格者ではないことを最初にお断りしておきます。テーマは「感性の目覚め」です。

## 感性とは何か

「あの人は感性が豊かだ」とか、「彼は感性が鋭い」とか、「君とは感性が合わない」とかよく言われますが、「感性って何」と問われたとき、明確に答えられる人は、あまりいないと思います。感性って、何なのでしょうか。辞書を引いてみると、「外界からの刺激を、直感的に受け取る能力。感受性」（『福武国語辞典』）、「対象から刺激を感じ取る直感的な能力。感受性」（『集英社国語辞典』）とあります。まあ、英語で言うところの“sensibility”に相当すると考えたらよいのかもしれません。例えば、「リーンリーン」という鈴虫やコオロギの声を聴いた時に、「うるさい虫の声」、「勉強の邪魔だ（雑音だと感じる）」という反応を示す人もいますが、「秋だなぁー（心地よく秋の訪れを感じる）」という受け取り方もあります。これこそまさに、感受性が鋭いとか、感性が豊かということになるのですが、私は常々「リーンリーン」という虫の音を受け止める「人間側のセンサーが鋭い」とか「感覚器官の性能が良い」という問題に還元できる話だけではないように感じています。日常生活のあらゆる場面で我々はいろいろな出来事に遭遇します。その

折々に、どう感じ取るのか、どう受け止めるのか、といったもっとジェネラルな問題にも、感性が関係してくるような気がしています。

ここで、感性が何かをもっと深く知るために、人間の能力とか学びの話をしましょう。

人間にはオギャーと生まれた段階で、いやその前の胎児の段階から本能があります。所謂生存本能というものでしょう。本能は動物にもありますね。私の家には今仔猫がいますが、おしっこをしたあとで、誰が教えたわけでもないのに、砂を掻いて隠すような仕草をします。ペットシートの上でも掻いて、シートをめちゃくちゃにして家族を困らせています。そうです。本能は動物にも備わっているのです。しかし、万物の霊長たる人間は本能のレベルに止まってはいません。人間の赤ちゃんには原始的な（素朴な）感情があります。お腹がすいたら泣き、おしっこをしたら泣く。そして、お腹がすいている時に、おっぱいを貰ったらニコっと笑う。おそらく、気持ち良い感情や不快な感情を知らせてくれるのでしょう。赤ちゃんは非常に感情豊かです。1歳くらいから知性（知恵）を身に付け始めます。もちろん、学問を始めるのは学校へ行ってからですが、勉強だけの問題ではありません。両親をはじめ祖父に祖母、叔父叔母、近所の人々までもが個人教授をしてくれて、世の中のことを教えてくれるのです。何かを体験して、試行錯誤をして、反省し、知恵を身に付けるのもこの時期からでしょう。さらに成長すると、善悪の判断をする理性が芽生えます。知恵の発達は確かに素晴らしいのですが、時折、利己的になったり、暴走したりします。また、感情や欲求が抑えられなくなることもあります。そんな時に、ブレーキをかけてくれるのが理性です。

ほとんどの人は、知性が身に付いて、理性を発達させたらそれで十分と思いがちです。たとえば、大学という最高学府に行き、善悪の判断ができ、感情や衝動的な欲求をコントロールできるようになったら、「自分は立派な大学生だ」とか「自分は大人なのだ」と人は考えがちです。前に座っておられる皆さんもそう考えておられると思います。しかしながら、私にはこれが人間の完成形だとは思えません。私には人間は理性まで身に付けたら終わりではなくて、理性の次の領域を身に付けないといけないような気がしています。

知性、理性の教育が終わったら、次に身に付けるべきものが感性だと思います。しかし、これが難しい。知性を身に付けるために、私たちは教科書や参考書、あるいは幅広い読書で勉強を重ねてきました。受験勉強もその一環かもしれません。理性に関しても道徳の教科書や宗教書や哲学書をはじめ、先人たちの話や経験が参考になってきました。つまり、知性や理性には具体的な参考資料があり、学校や塾、予備校あるいは少し怪しいですが何かのセミナーとか宗教とか、とにかく具体的な学びの場と学ぶべきものが存在するのです。一方で、感性はどこで学ぶのでしょう。誰が教えてくれるのでしょう。「感受性」という辞書的な意味を超えた意味となると、何を参考にすればよいのでしょうか。感性とは、目に見えない、形のない、全く捉えどころのないものだから困ってしまうのです。でも一方で、感性は先天的なものだから、生まれつき備わっている人とそうでない人がいると言われると、それも違う気がします。

**私自身の捉え方**

私は、感性とは気づきだと思います。秋に虫の音を聞いて、自分が何に気づくかという問題です。そこには、正しいとか間違っているとかはありません。ただ、どのような気づきをしたら、「心地よく感じられるか」とか「美しく感じられるか」ということだと思います。でもこれは、快不快、美醜だけの問題でもありません。

人生のあらゆる状況、あらゆる事象に何を気づき、どう受け止めたらよいのかという問題にも繋がるからです。

50年あまりの、私の人生を振り返ってみても、何もかもが自分の思い通り、シナリオ通りに進んできたわけではありません。たとえば、大学院を出た後、当時は大学の非常勤講師の口もなく、高校の専任教員になりました。私の勤めた学校は柔道と野球にとりわけ力を入れている所謂体育会系の学校でした。体育会系の先生の声が大きく、生活指導や生徒指導などがきちんとできないと、一人前の教師だと認めてもらえないような雰囲気がありました。私が副担任として付いた担任の先生も空手6段のパンチパーマのおじさんで、数学担当であるのが不思議に思えるような人でした。「えらい職場に来たなぁ」と思うと同時に、私は「気づき」ました。「この職場で、体育会系のおじさんたちに認めてもらわないと、これから先、自分はどんな世界でも使い物にならないだろう」、「自分は確かに大学院を出ているが、体を使って働いたことがない。少なくとも今後数年間は丁稚奉公だと思って、高校教育に邁進しよう。生活指導でも何でも進んでやろう」と。こうして気づいた後は、服装検査でも頭髪検査（霧吹きで生徒の髪の毛を湿らせてパーマかどうか調べること―1980年代の話で今だったらヤバイですね―）でも必死でやりました。そうなると、体育会系の先生からも一目置かれるようになり、仕事に充実感が伴うようになりました。高校教師として自信もついてきました。3年間の高校教師生活でしたが、有意義に過ごせました。はじめから大学教員になっていたら、とても味わえないような貴重な経験ができたと今では思っています。

肝心なことは、感性とは「気づき」なのですが、決して悲観的に受け止めないということです。自分がよりポジティブになれるような、より楽観的になれるような「気づき」をするように努めることです。たとえば、同志社大学の学生さんたちの中には、同志社大学が第一志望だった人もいれば、京都大学と併願したが思いが叶わなかったので仕方なく同志社大学に来た人もいるでしょう。そこで、「気づいて」欲しいのですが、「ここが京都大学ではない」というような悲観的な「気づき」をしても、落ち込み、不愉快になり、何もする気がなくなるだけで、そこからは何も生み出せないということです。就職活動に関しても同じようなことが言えると思います。外から見ていた時の会社のイメージだけに縛られて悲観的にならないことです。入社して一生懸命働いてみたら、見える景色が全く違うということです。先ほど話した、私の高校教師時代も、高校という組織の一員として前向きに頑張ってみると、それ以前にイメージしていたのとは全く違う景色が見えてきた（一時はずっと高校教師をやっても良いような気にさえなった）のです。要は、新しい状況で頑張れるように、自分がよりポジティブに、より楽観的になれるような「気づき」方をするということです。このような気づきの話を披露すると、「所詮は自分の都合のよいように、楽観的な解釈をしているだけだ」という反論が聞こえてきそうですが、どうせ人生はままならないものなのです。努力は必要ですが、天の配剤か、いくら努力しても思うようにならないことはあります。そんなときに、悲観していても仕方がありません。私自身の経験に照らして考えると、そういうときに、（神によって）与えられた環境で頑張ってみると、意外な光景が見えてくる―思いも及ばなかったような遣り甲斐や喜び、充実感が得られる。（天は私にこれを教えたかったのだなどと感じられる瞬間があるということです。）結局、秋の虫の音と同じなのです。虫の音という同じ現象、同じ音に関して、「美しい音色」や「秋の訪れ」と感じ取るのも自分、「うるさい雑音」と感じ取るのも自分なのです。

**感性を目覚めさせる方法**

先ほど、感性は知性や理性の次の段階という話をしましたが、おそらく、「意識」や「心」、「思い方」の問題だから、より高次なものなのでしょう。この「気づき」は、私には、「自分が気づく」というよりも、何か目に見えない力が働いて、「気づかせてもらっている」と常々感じられます。目に見えない力が、神なのか、天なのか、天使なのか、守護霊なのか何なのか、私にはわかりませんが、そういう力が働いていると感じる瞬間があるのは確かです。

これまで感性について話してきたのですから、最後に「感性を目覚めさせる方法」、「よい気づき」を得る方法をお話ししておきます。それは、「よいことに気づきますように」と日々思い続けることです。経験から言えることですが、いつも念じていたら、身体や心がそうなってくる。自然に気づかされるようになっていくということです。「気づかないといけない」、「気づけ、気づけ」と肩ひじを張る必要はまったくありません。話は少し変わりますが、たとえば、「人に親切にしなさい」と、誰かに言われて、実際に親切な行動を取ろうとすると、せっかくの親切がぎこちなくなってしまい、かえって、相手に警戒されるようなことがあります。そんな時は、親切な行動をするのではなく、「親切にしよう」といつも思っていればよいのです。いつも思っていれば、いつか、何の意識もなく、身体が勝手に動いて親切な行動をとっているということになると思います。だから、「気づき」に関しても同じです。「よい気づき」をしたいといつも思っていれば、身体や心が自然にそのような姿勢、目に見えないところからの信号を受け取る準備ができるのだと思います。こう考えたら、知性や理性の次にくる、より高次な「感性」の習得には、難しい本も勉強も不要、案外やさしいということがわかるでしょう。

2017年1月18日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録